

# マイノング学派における ラッセルのパラドクス

中川 大

2002年11月10日

日本科学哲学会ワークショップ「ラッセルのパラドクス100年・(1)——その起源と診断」提題  
於新潟大学教養校舎

## はじめに

今回の発表の眼目は、ラッセルのパラドクスの「起源」をめぐる考察にあります。けれども、じっさいに検討されるのは、ラッセル (Russell, B., 1872-1970) がパラドクスを発見する以前の時点でも、発見の時点でさえもなく、ラッセルがホワイトヘッド (Whitehead, A.N., 1861-1947) との共著『プリンキピア・マテマティカ』 (*Principia Mathematica*) (第1巻は1910年に出版) で、パラドクスに一応の解決を提示した、さらにそのあとの時点において提出された、ある議論です。これはいささか奇矯なやり方だと受け取られるかもしれませんが、そう捨てたものでもありません。じっさい、太陽のある方角を知ろうとして、あわてて空を見上げて眼を痛めるよりは、地面に目をやっけて影の向きを調べるほうが賢明であると思われます。(もちろん、地面に影を落としている、その当ものがラッセルのパラドクスであり、影が「ラッセルのパラドクスがどのように受け止められたか」ということです。)

素材として取り上げるのは、エルンスト・マリ (Ernst Mally, 1879-1944) が、1914年の論文<sup>1</sup> で提出した、観念論を論駁するためのある議論です。つまり、マリはこの論文で、ラッセルのパラドクスに並行的な議論を構成することによって、観念論を攻撃しようとするわけです。われわれは、マリの議論のなかで、ラッセルのパラドクスに直接かかわる部分を概観したあと、この議論について (マリの師にあたる) マイノング (Meinong, A., 1853-1920) が残した批判的な注釈<sup>2</sup> を

<sup>1</sup> “Über die Unabhängigkeit der Gegenstände vom Denken” in *Zeitschriften für Philosophie und philosophische Kritik*, CLX(1914), S.37-52.

<sup>2</sup> マイノングの次の論文の第2章にある。“Über emotionale Präsentation” in *Alexius Meinong: Gesamtausgabe*, Vol.III: *Abhandlungen zur Werttheorie*, 1968, Akademische Druck- und Verlagsanstalt, S.183-465. Orig. in *Sitzungsberichte der philosophisch-historischen Klasse Kaiserlichen Akademie der Wissenschaften in Wien*, Vol.183/2 (1917), S.1-181. なお、この著作には次の英訳がある。Meinong, A., *On Emotional Presentation*, Translated, with an Introduction, by Schubert Kalsi, M.-L., 1972, Northwestern U.P..

瞥見することになります。

それらのなかには、相当に議論の余地のある論法も現われてきますけれども、われわれの関心は、彼らの主張の妥当性を査定するところにはありません。むしろ、彼らの思考がどのような枠組みのなかで動いているのか、そのおおよそを見積もることが目標です。このようにして押さえたいのは、ラッセルのパラドクスがマイノン学派（グラーツ学派）にどのように受容されたかということとともに、学派内でのその受容の仕方における微妙な差異でもあります。ここではとりあえず、マイノンとマリのふたりの議論のあいだに、その差異をとらえようと試みることにします。

しかしながら、マイノン学派の動向を取りざたするのは、むしろそこにおいて見て取られることを、ラッセルの哲学を測るための物差しにしたいからです。つまり、初期ラッセル哲学のうちに、いわゆるラッセルのパラドクスは、どのように位置づけられうるのか、それを考えるのがわれわれの本来の目的です。そして、そのような位置づけこそが、われわれがなにかをラッセルのパラドクスの「起源」と呼びうる時の、そのひとつの意味であることでしょう。この問題についての若干の見通しを述べることで、今回の発表を終わりたいと思います。

## 1 マリの観念論論駁

マリは前掲の論文で、次の4つの基本問題を掲げ、これらを検討することを通じて、観念論を論駁しようとしています。

- I. 思考 (Denken) は自分自身を把握 (erfassen) しようか？
- II. 「対象 (Gegenstand)」とは「思考されるもの (Gedachtes)」のことであるか？あるいは、思考は思考されるものそのものしか指示 (treffen) しえないのか？
- III. あらゆる対象が把握可能であるのか？
- IV. 有ること (Sein) は把握されていること (Erfastsein) と同一であるのか？

マリの全体的な戦略は、まず第1の問いについて検討し、その結果に依拠して他の3つの問いについて吟味することです。われわれの関心からしてまず目を惹かれるのは、マリが、第1の問いに答えるための議論を、ラッセルのパラドクスと並行的に構成していることでしょう。また、マリは、第3の問いに答えるにあたって、ラッセルのタイプ理論を参照しています。さらにもう一つ、次のことに注目すべきでしょう。マリはもちろん、これらの問題に肯定的な答えが与えられないことを示すことによって、観念論を論駁しようとしています。しかし、その際にマリがとる議論の方向は、それらの問いに否定的な答えを与えようとするものではありません。たとえば、第1の問いに対してマリが示す解答は、「思考は自

分自身を把握しえない」ということではありません。マリはむしろ、「思考は自分自身を把握する」という言明は、そもそも正当な意味 (legitimer Sinn) をもたない、と主張しようとするのです。

いずれにせよ、マリのこの論文では、ラッセルのパラドクス、さらにはそれに対するラッセル的な解決 (タイプ理論) までもが、観念論の論駁という課題の検討に資するべきものとしてとらえられていることが分かります。論文の論理的な順序には逆らうこととなりますけれども、第3の問いに対する、タイプ理論を採用した議論<sup>3</sup> をまず見て、続いて、ラッセルのパラドクスに準えらえた、第1の問いへの解答<sup>4</sup> を追っていくことにしましょう。

マリはまず、帰納法によって第3の問いに肯定的に答えようとする議論——つまり、既知の対象はいずれも把握可能な対象であったのであるからして、どんな対象も把握可能であるはずであると主張する議論——はいんちきであると指摘します。というのも、たとえば、われわれがより多くの物体を研究して、それらが例外なく重さをもつということを発見することによって、重さをもたない物体が存在しない蓋然性が高まるとすれば、それは、われわれの研究器具が、重さをもたない物体ははじめから検知しないような道具ではないときに限るからです。

したがって、この問題には、経験的な探求ではなく、なんらかアプリアリな考察がおこなわれなければなりません。そして、この問いに肯定的に答えようとする人は、この問いを発することがそれ自体でこの問いへの肯定的な答えを帰結する、と主張するかもしれません。なぜかといえば、「すべての対象は把握可能であるか」というこの問いが有意味な問いであるとするならば、問いを発した人はすべての対象を、——「対象」というきわめて無内容な一般概念のもとであるにせよ——すでに把握しているのでなければならぬからです。

しかしマリは、「思考は自分自身を把握する (あるいは指示する)」という言明が無意味であること (第1の問いについての考察から引き出される) を論拠に、この議論を否定します。というのも、この言明が無意味であることから、われわれがある人物について、「彼が自分自身の思考を指示している」と語ることも無意味であることが帰結するからです。「すべての対象は把握可能であるか」という問いをたてている人が、ほんとうにすべての対象を指示してそう問うているのであれば、彼の目下の思考もまた指示されるのでなければなりません。そのような思考もまた対象であるからです。彼が自分の目下の思考をも指示しているのであるならば、「彼が自分自身の思考を指示している」と述べることは真であることを述べることになり、したがって、この言明は有意味であるはずでしょう。ところが、これはさきほどの帰結と矛盾しますから、問題の問いは、それに肯定的に答えようとする議論の前提に反して、むしろそれを問うこと自体が無意味であるような問いだということになります。一般に、「すべての対象」について言

---

<sup>3</sup>Mally, *ibid.*, S.47-49.

<sup>4</sup>*Ibid.*, S.38-39.

明をなすことは、正当な意味をもちません。言明それ自体は、その言明がそれらについて真であったり偽であったりする諸対象の領域の、つねに外側にあるからです。

ここでラッセルのタイプ理論が参照される理由を、詳しく述べる必要はもはやないでしょう。諸対象には、継起する「次元 (Ordnung)」が区別されねばならず、たとえば第一次元のすべての対象を指示する思想 (Gedanke) は、それらの対象より高い次元に属していなければなりません。すべての対象が把握可能であるかどうかと問うことには意味はなく、有意味に問えるのは、これこれの種類の対象がこれこれの種類の思想を通じて把握可能であるかどうか、ということだけなのです。

さて、マリによれば、第1の問いこそが、「もしもそれが明晰にされることさえあれば、認識論的観念論も批判的観念論も存在しなくなるであろう<sup>5</sup>」ような問いであり、彼の議論の全体が、この問いへの解答に依存しています。マリの議論を追ってみましょう。

「思考 (ないし思想) Dが自分自身を指示する」ないし「DがDを指示する (D trifft D)」という文が、正当な意味を有すると想定しましょう。もしもそうであるとすれば、この文は、思想Dさえ確定されれば、真であるか、あるいは偽であるはずでなく。そのとき、「DがDを指示しない (D trifft D nicht)」という文もまた、意味を有するのでなければなりません。なぜなら、さきほどDと同じであれば、この文は必然的に、偽であるか、あるいは真であるはずだからです。それゆえ、「自分自身を指示しない思想」ないし「Dを指示しないD (D, das D nicht trifft)」という思想Gがあるのであり、また、ひとは「Dを指示しないDがある」とか「Dを指示しないDがない」とか述べることができることになるでしょう。したがって、思想G（「Dを指示しないD」ないし「自らを指示しない思考」）は正当な思想であることとなります。そこで、次のように問うことができるはずでしょう。—— G自身は自らを指示するのかもしれないのか？

さて、この問いが肯定的に答えられるのであるとすれば、つまり「GはGを指示する」ということとなります。ということは、GはGにおいて思考されていた種類の思想なのであり、すなわち自らを指示しない思考なのだということになります。いっぽう、問題の問いが否定的に答えられるのだとすれば、「GはGを指示しない」ということとなります。したがって、Gは自らを指示しない思考であることとなりますけれども、ということつまり、Gにおいて思考されていた種類の思想にほかならないということであり、すなわちGによって指示される思想だということにほかなりません。

つまるところ、問題の問い——「GはGを指示するか」——への肯定的な答えと否定的な答えとは同値になり、これは矛盾です。このような結果に導かれたのは、われわれの最初の想定が誤っていたからにほかなりません。すなわち、「思

<sup>5</sup> *Ibid.*, S.38.

考Dが自分自身を指示する（あるいは把握する）」という文が、正当な意味を有するという想定が誤っていたのです。真実は、これらの語は真でも偽でもなく、したがって正当な意味を欠いているのです。

## 2 マイノングのマリ批判

マイノングは、このような「ラッセル-マリのパラドクス (Russell-Mallysches Paradoxon)」について、それが矛盾を導く議論であるように見えるのは表面上のことだ、という診断を下しています。彼はまず、ラッセルのパラドクスを「派生クラス (abgeleitetes Kollektiv)」という概念を用いて読み換え、そのうえでマリのパラドクスを批判的に検討することになります。その順序に従って見ていくことにしましょう<sup>6</sup>。

すべての存在するテーブルと椅子と家の全体は、自然なクラスをなします。このクラスについて、椅子の集合 (Menge) をその要素に加えようとは誰も思わない、とマイノングは主張します。それに対して、家の集合や椅子の集合がそもそもの要素に想定されているときには、話しが違ってきます。こうした集合たちとこうした集合たちの集合とをどちらも要素として含むクラスをつくることに、いささかも奇怪なところはありません。さて、一般に、クラスAが与えられたとき、そのクラスの要素にクラスA自身を加えてつくられたクラスを、もとのクラスAの派生クラスと呼ぶことができるでしょう。そのとき、もろもろの派生クラスのうちに、自然な (natürlich) 派生クラスとそうでない派生クラスとを区別することができます。すべての椅子とすべての椅子の集合とからなるクラスは、すべての椅子の集合の派生クラスであって、不自然な派生クラスです。いっぽう、すべてのテーブルの集合とすべての椅子の集合とすべての家の集合とこれら3つの集合を要素とする集合とからなる集合は、すべてのテーブルの集合とすべての椅子の集合とすべての家の集合とからなる集合の派生クラスであって、自然な派生クラスです。自然であるかそうでないかの区別は、もとの集合とその要素とのあいだに相似性 (Ähnlichkeit) があるかないかによって決まります。

さて、マイノングの意図は、この「自然な派生クラス」ないし「自然な派生的集合」という観念を使って、ラッセルのパラドクスを再解釈することにあります。つまり、「自分自身を要素としない集合からなる集合は自分自身を要素とするかしないか」という問いに代えて、「自然な派生的集合をもたない集合からなる集合は、自然な派生的集合をもつのかもたないのか」という問いをたてるわけです。この問いへの答えが否定的であれば、問題の集合は自然な派生的集合をもたないのですから、その要素（自然な派生的集合をもたない集合）と相似的だということになります。いっぽう、答えが肯定的であれば、問題の集合は自然な派生的集合をもつのですから、その要素と非相似的だということになります。前者

<sup>6</sup>Meinong, *ibid.*, S.294-310. Translation, pp.10-22.

の場合は、非相似性が新たな相似性の基礎 (Grundlagen)<sup>7</sup> を提供し、後者の場合は、相似性が新たな非相似性の基礎を提供します。

ここには、ラッセルのパラドクスと並行的な議論が現われるけれども、矛盾が生じているわけではありません。「黒と白とはたしかに互いに異なるけれども、赤であるとか青であるとか言われることは両者のどちらにも許されず、その点では両者は同じである<sup>8</sup>」。2つの対象が、ある点では相似的であるけれども、別の点では非相似的であるということがありえます。相似的な対象ならクラスをつくりうるけれども非相似的な対象ではそれができないというのであれば、あるしかたで考察された2つの対象はクラスをつくりうるけれども、別のしかたで考察された同じ2つの対象はクラスをつくりえないということになるでしょう。

マイノングは、ラッセルのパラドクスについてのこのような考察をふまえて、マリのパラドクスの検討に進みます。マリの議論が提示しているものはたしかに、同時に自らを指示しかつ自らを指示しない思考という、奇妙なものにほかなりません。しかし、それは、異なる色が互いに異なることにおいて相似的でありうるように、矛盾ではないとマイノングは主張します。問題の思考が、自らを指示するのと自らを指示しないのとは、それぞれ別の基礎に関してそうなのです。

さて、マイノングがここで示している、彼ならではの思考の方法には興味深いものがあります。マイノングは、マリが彼の議論において、自らを指示しない思考の無意味性 (Sinnleerheit) を、つまりそこになんらかの意味での対象の欠落を指摘しようとしていることに、相当の理由があることは認めます。しかし、マイノング自身の考えに従えば、ラッセル-マリの議論が開示しているのは、文字通りの意味での対象の欠落ではなく、むしろある特殊な種類の対象にほかなりません。彼はその種の対象を「欠陥のある対象 (defekter Gegenstand)」と呼び、これを彼の対象理論の枠組みのうちに収める方途を模索するのです。これは、単称名辞をめぐる議論において、マイノングが選んだ方向を連想させずにおきません。その議論において彼は、「円い四角」のような表現が無意味であること、つまり円い四角という対象が欠落していることを認めるかわりに、むしろ円い四角という不可能な対象 (unmöglicher Gegenstand) を要請したのでした。

マイノングは、思考が自らを指示しえないことの証明にマリが成功していないと結論するいっぽう、自分の批判的な議論によっては、「マリが観念論に敵対するその姿勢は揺るがされることはない」とも述べています<sup>9</sup>。マイノングとマリとの両者の見解が分かれるのは、ラッセルのパラドクスを、マイノング学派的な対象理論のなかにいわば着地させるときの、ふたりの流儀の違いに端を発していると思われます。その意味では、これまで見てきたマイノングのマリ批判は、学

<sup>7</sup> 「基礎」はマイノングの関係論や高次対象論における基本観念であるけれども、ここではそれについて論じることは避ける。以下のマイノング研究などを参照されたい。Grossmann, R., *Meinong*, 1974, Routledge, Schubert Kalsi, M.-L., *Alexius Meinong on Objects of Higher Order and Husserl's Phenomenology*, 1978, Martinus Nijhoff.

<sup>8</sup> *Meinong*, *ibid.*, S.298.

<sup>9</sup> *Ibid.*, S.308-309. Translation, p.21-22.

派内の立場の微妙な差異を示すものでしかありません。しかし、それにもかかわらず、ふたりの微妙な差異がわれわれの関心をも惹くのは、その差異が、両者の次のような姿勢の違いに由来するからです。つまり、マイノングがあくまで「対象」の水準に依拠して思考しようとするのに対して、マリは、「表現」の有意味性と無意味性を支点として、彼の思考を進めようとしているのです。これをマイノング学派における「言語的転回」と呼んでは勇み足でしょうか。

### 3 ラッセルと彼のパラドクス

われわれは第1節で、マリが、彼らの学派にとって中心的な論題のひとつである観念論論駁のために、ラッセルのパラドクスとタイプ理論を援用しているのを見ました。またわれわれは、第2節では、マイノングがマリの議論をひきとって、彼の対象理論に新しい着想を加えようとしているのを見ました。こうしたことが起こったのは、もちろん、自らが記号論理学や数学の哲学に強い関心をもってマリのラッセルのパラドクスというそうした分野での当時の話題を、彼らの学派の問題にひきつけて取り上げたからにはほかなりません<sup>10</sup>。しかしながら、いったんわれわれがラッセルのパラドクスの起源という論題をたてて、その観点でこの経緯を眺めるとするならば、また違った図柄をそこに認めることが可能であるように思われます。ただしそれは、ラッセルがフレーゲ (Frege, G., 1848–1925) へあてた書簡でパラドクスを指摘した<sup>11</sup>1902年という時期には、また彼が『数学の原理』でタイプ理論による解決を示唆した<sup>12</sup>1903年という時期には、ラッセルはマイノング学派の強い影響のもとにあったと、一般に考えられている<sup>13</sup>ということ、念頭に置いたときにはありますけれども。

要するにわれわれが示唆したいのは、これまで見てきたような、一連の議論の受け渡し関係を、ラッセル側からマイノング学派側への一方通行のものとして理解するのは、かえって実情に合わないのではないかということです。あるいは、次のように言ったほうがよいかもしれません。マリの観念論論駁の議論は、もともと数学の哲学における着想であるラッセルのパラドクスを、まったく別の脈絡

<sup>10</sup>マリの記号論理的な著作には、“Gegenstandstheoretische Grundlagen der Logik und Logistik” in *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, 148.Band, Ergänzungsheft, Leipzig, 1912, 87S がある。また、彼の数学の哲学への関心を示す論文には、たとえば、“Untersuchungen zur Gegenstandstheorie des Messens” in Meinong, A.(ed.), *Untersuchungen zur Gegenstandstheorie und Psychologie*, III.Band, Verlag J.A.Barth, Leipzig, 1904, S.121–262 がある。

<sup>11</sup>Frege, G., *Wissenschaftlicher Briefwechsel*, hrsg. von Gabriel, G. et al., 1976, Felix Meiner, S.211–212. 野本和幸編『フレーゲ著作集 6 書簡集 付「日記」』、2002年、勁草書房、118–119頁。

<sup>12</sup>Russell, B., *The Principles of Mathematics*, 1903, George Allen & Unwin, pp.523ff..

<sup>13</sup>ラッセルは、1899年から1907年のあいだに、マイノングの著作についての書評を7本も書いている。また、*The Principles of Mathematics*の47節で、「思考の対象となりうるいかなるものをも、真ないし偽である命題のなかに現われうるいかなるものをも、一と数えることのできるいかなるものをも、わたしは「項 (term)」と呼ぶ」と述べるとき、それはマイノング的对象理論の枠組みに従っているということもできよう。Cf. Douglas Lackey’s remarks in Russell, B., *Essays in Analysis*, ed. by Lackey, D., 1973, George Allen & Unwin, pp.17f..

へと転用したものであると、一見思えます。しかし、それは必ずしもそうとはいえないのではないだろうか、というのがここでの論点です。つまり、1902年という時点でのラッセルは、マイノング哲学の影響のもとで、いわばマイノング的な思考枠組みの内側で彼の思考を運動させていたのであり、その運動の帰結として、ラッセルのパラドクスが見出されたとは、考えられないのでしょうか。そして、だからこそ、マリヤマイノングは、ラッセルのパラドクスやタイプ理論という問題設定を、彼らの議論に親和的なものとして、当然のように受け入れたのだとは、考えられないのでしょうか。

われわれがこのような見方に誘われる理由のひとつは、問題のパラドクスが、フレーゲの体系への批判として提起されているという、周知の事実にはかなりません。どうしてそれが理由になるのかと言えば、ピーター・サイモンズ (Peter Simons, 1950-) が、表示句ないし単称名辞についてのフレーゲの所説に対するラッセルの批判は、実は観念論論駁にほかならないと示唆しているからです。すなわち、サイモンズに従えば、ラッセルはフレーゲの意義と意味の理論を、ブラッドリー (Bradley, F.H., 1846–1924) の哲学と重ね合わせることに批判しているのです<sup>14</sup>。サイモンズの説が正鵠を穿っており、しかもラッセルのパラドクスの起源に観念論論駁という問題設定の影を認めることができるのであれば、われわれは、ラッセルのパラドクスと記述理論という、初期ラッセル哲学を特徴づける2つの議論を、これまでとは異なる視点からとらえることが可能になります。つまり、それらは単にフレーゲの論理学と言語哲学とを検討する過程で生まれた議論というよりも、むしろマイノング学派的な観念論批判の枠組みのうちで形作られた議論であったと理解することができるかもしれない、ということです。

さて、フレーゲの意義と意味の理論を否定し、記述理論を提唱することは、同時にまた、マイノングの対象理論とも決定的に手を切ることを意味していたはずでした<sup>15</sup>。そのような観点からすれば、タイプ理論はマイノング学派的な議論と親和的であったはずですから、記述理論が提唱された後には、それは捨てられてしまうのが、むしろ自然な成り行きであったように思われます。つまり、単称名辞の有意味性という主題において、記述理論を通じて、ラッセルがマイノングの引力圏から離脱するのと並行的なしかたで、ラッセルのパラドクスの解決という主題においても、なんらかの新しい理論が構築されて、マイノングの影響力が

---

<sup>14</sup>Simons, Peter, “On What There Isn’t: The Meinong–Russell Dispute”, in Irvine, A.(ed.), *Bertrand Russell: Critical Assessments*, vol.III, 1999, Routledge, pp.69–100 or in Simons, P., *Philosophy and Logic in Central Europe from Bolzano to Tarski: Selected Essays*, 1992, Kluwer Academic, pp.159–191.

<sup>15</sup>じっさい、ラッセルが記述理論を提唱した1905年の論文では、フレーゲの理論とともにマイノングの理論が批判のまな板に載せられている。Cf. “On Denoting” in Russell, B., *Logic and Knowledge: Essays 1901–1950*, ed. by Marsh, R.C., 1956, pp.41–56 or in Russell, B., *Foundations of Logic, 1903–05: The Collected Papers of Bertrand Russell 4*, ed. by Urquhart, A., 1994, Routledge, pp.414–427. 清水義夫訳「指示について」、坂本百大編『現代哲学基本論文集 1』、1986年、勁草書房、45–78頁。

払拭されてしかるべきであったかもしれません。そしてじっさい、記述理論を提唱した時期のラッセルは、タイプ理論以外の選択肢を模索していたように見えます<sup>16</sup>。けれども、結局ラッセルは、それらの探求をあきらめ、分岐タイプ理論として洗練された形ではあるけれども、1903年の時点ですでに得ていた着想に戻って、『プリンキピア・マテマティカ』を著わすことになります。

もしも仮に以上のような展望が容認されるものであれば、われわれは、初期ラッセル哲学の展開を、マイノング学派的枠組みから遠ざかろうとする力（記述理論がもつ方向の力）と、マイノング学派的枠組みへと引き戻される力（タイプ理論がもつ方向の力）とから合成されるものとして描き出すことができます。そして、そのような描像によるならば、ラッセルがうまく果たせなかった、ラッセルのパラドクスをいわば記述理論がもつ方向へと突破して解決するという仕事は、ウィトゲンシュタイン (Wittgenstein, L., 1889–1951) の『論理哲学論考』を俟つことになるでしょう。とはいえ、われわれのこれまでの考察に付会して述べるならば、このラッセルからウィトゲンシュタインへと進む思考の移動は、マイノング学派のうちにすでに存在した思考の移動のかたちが反復されたものに過ぎないともいえます。それは、マイノング的な対象理論からマリの対象理論への移行です。さきに見たように、マイノングが欠陥のある「対象」を措定して考えるところで、マリが自らの思考を動かす梃子にするのは、「思考が自分自身を指示する」という表現が正当な意味をもちえないという着想でした。そして、『論考』のウィトゲンシュタインは、ラッセルがパラドクスを解くために記号の意味（それはやはり「対象」なのでしょう）について考えたことを批判し、自分自身をアーギュメントとする関数を正当に表現する記号がありえないことを指摘して、ラッセルのパラドクスを解決しようとするようになるでしょう<sup>17</sup>。

---

<sup>16</sup>前掲の *Essays in Analysis* や、あるいは *Foundations of Logic, 1903–05: The Collected Papers of Bertrand Russell 4* に所収の論文や草稿を参照のこと。

<sup>17</sup> *Tractatus Logico-Philosophicus*, 1922, Routledge & Kegan Paul, 3.33–3.333. (奥雅博訳『論理哲学論考』、『ウィトゲンシュタイン全集1』、1975年、大修館書店、1–120頁所収。)